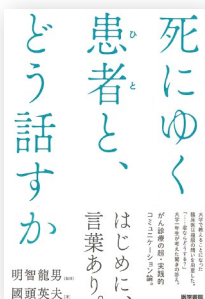




ヒエラルキーに抗する 「可憐さ」を獲得するために

評者 佐藤恵子

京大附属病院 臨床研究総合センターEBM
推進部 特任准教授



死にゆく患者と、 どう話すか

明智龍男＝監修

國頭英夫＝著

定価：本体 2,100 円＋税／A5・306 頁／医学書院／2016

[ISBN978-4-260-02857-8]

本書は、著者の國頭先生が「死に臨んだ患者さん」の看護大学の1年生、つまり、ついこの前まで

した様子をまとめたものである。死にゆく患者さんと話をするのは、がん領域の医療者であっても、しんどいことである。私も昔、乳がんが骨転移のある患者さんに、「よくならないのだったら、いっそのこと早く死にたい」と言われて往生した。医療者がへどもどする姿がみっともないのは自明であり、なるべく避けているのが無難でもある。「この病院ではできることがなくなりましたので、転院をお勧めします」という常套句は、患者さんが言われたくないセリフの1つであるが、医療側にとっては救いの抜け道であるがゆえに、今日もどこかで“がん難民”が生まれているのだろう。

しかし、「それをやっちゃあ、おしめえよ」と國頭先生は言う。『『どうせ治らないから』』といって患者を見放すことは許されません。『死んでいく』患者といかに向き合い、少しでもベターな『ライフ』を過ごしてもらえるか、というのは我々の使命です」と、序盤から活を入れる（「はじめに」より）。理由も単純明快で、患者さんは死を迎えるその日まで生き続けるわけだし、果てしない孤独と山のような不安を抱えながら歩くのはつらからう、だからそれを理解している人が三途の川の手前までついていかなきゃいけないのは道理でもあり、人情でもある。それに、心を穏やかに保てさえすれば、限られた時間を豊かに過ごすことができるだろう。おお、シャクにさわるくらいいいではないか。実際は、かわいい学生たちに囲まれて、やに下がっているひびジジイにしか見えないのだけれど。

腹をくくって患者さんも自分も守る

それはともかく、問題はどのようにやって実現するかだ。出される課題は、先生が監修されたTVドラマ「白い巨塔」(平成版)などに登場する、「恩知らずで、気紛れで、偽善者で、尊大で、臆病で、自分勝手に、欲張りで、厚かましくて、けちで助平で馬鹿」な(p.248)患者や家族と医療者が織りなす、リアルでややこしい事例である。さあ、みんなどうする？

正解のない難題を次から次へとふっかけられて、学生たちもさぞかし困ったに違いない……と思いきや、彼らは医療者として何を大事にすべきかについて、「命とはなんぞや」という深いところまで降りていって考え、自分の言葉で語っている。医療現場に出たこともなく、問題には必ず正解が1つあって、それを探して答えればよいという受験勉強に慣れきっているはずなのに。しかし、そういう彼らだからこそ、生き死にの問題を自分の頭で考えることが新鮮で、血がたぎるような刺激的な経験になったことは想像に難くない。彼らにとってそれが快だったか不快だったかはわからないが、彼らが出ていく先の医療現場もまた例外なく、「恩知らずで、気紛れで(中略)馬鹿な」人間が運営しているがゆえに、“患者の呼吸器を止めてよいという同意書に家族の署名をもらう”“技術があるかぎり延命治療を続ける”という行動原理が日常である可能性は大だ。その状況で“褒められはしないけれど不満や怒りも呼ばず、まあまあ納得してもらえる”道筋を立てるには、心のよりどころを頼りに自分のアタマで考え抜く力、ダークサイドをさらけ出して他者と対話する技能、矛盾を抱える不快さに耐えるしなやかさ、そして自分をも客観視してきちんとパフォーマンスできる胆力が必要であり、これを各人の自家薬籠中に持たせることが、ひびジジイの深慮遠謀なのである。特に医療機関のようにヒエラルキーが支配する場所では、このようなしたたかで可憐な人の存在そのものが、患者さんも医療者自身も守り、息苦しい現場を心地よい風が通り抜ける快適な空間に変える鍵になるだろう。そして、全編を通して読者にも、ちょっと立ち止まって考えてみてはどうか、腹をくくって行動してみてもどうか、とささやかにかけてくるのである。“オレが後ろ盾になってやるからさ”というおまけつきで。

教職が本務ではない國頭先生にここまでやられてシャクにさわることもこの上ないが、本書は、日々の臨床で“この治療は患者の利益になっているのかな”という疑問が脳裏をよぎりまくっている人や、終末期医療に関わる人、医療者の教育を担当する人すべてにお勧めしたい。國頭先生の語り口を知る人はニタニタしながら、そうでない人も見学者として講義室に座っているような臨場感を味わいながら、「人を診る、人を育てる、人を慈しむ」意味を噛みしめられること請け合いです。